

日本記者クラブ会報

第 476 号
2009 年
(平成 21 年)
10 月 10 日 発行

〒100-0001
東京都千代田区内幸町二ノ二ノ一
日本プレスセンタービル
© 社団法人 日本記者クラブ
http://www.jnpc.or.jp

過ぎた夏

選挙を通じて政権交代がおきると、こんなにも報道の様相が変化するものだろうか。朝夕のテレビをみて驚いている。

国の統治機構の劣化を背景に、官僚主導から政治主導へと訴えて、民主党が大勝したのだから当然なのかもしれない。

鳩山首相の初会見も、深夜の閣僚会見もやはり新鮮だった。マニフェスト実現へとまなじりを決めて新政権はスタートした。もう少し腰を沈めてじっくりと取り組んでもよいのではないかとも思うが、矢継ぎ早だ。首相の外交デビューも上々だった。脚光を浴びた国連演説、G20出席の間、首脳会談を次々こなした。晴れやかで、ヒューマンな感じがした。ファースト・レディの歌唱も巷の評判になった。しかし、始まったばかりの蜜月なのだ。「未知との遭遇」は時間と共に重くなる。首相、閣僚、もちろん小沢一郎幹事長にも、即座に招待状を届けた。

逐次、おいでいただけるだろう。

8月総選挙で、恒例の夏の記者研修会は10月1日、2日にずれ込んだ。

研修プログラムに、会員と一緒の会見を二つ入れ、クラブの公式会見も体験してもらった。一つは法曹三者による「法の日」会見で、もうひとつはトヨタの豊田章男新社長の昼食会。後者は前日で「食事」は売り切れ、満員札止め状態に。3000人規模の大型会見になった。参加者の声を2、3ページに特集した。

ふり返れば天候不順で、劇的に政治が動いた夏だった。その8月、こころを打つ特上の話を聞いたことが忘れられない。先号で紹介するつもりで書いたのだが、スペースの関係で見送った。が、やっぱり惜しいので、窮屈だが下段に掲載した。ことしの夏一番のいい話だった。

何人もの会員が、人の話を聞いて、久しぶりにこんな感動したと感嘆した。うつくしい声の市井のおかあさんの話だ。全文はHPの速記録に。

今日の風、なに色？ これは「著者と語る」で招いた辻井いつ子さん(8・3)の1冊目の本のタイトル。あのヴァン・クライバーン国際コンクールで優勝したピアニスト・辻井伸行さんのお母さんだ。辻井さんは結婚した翌年、伸行君を出産。体重は標準だった。退院後に医師の夫から、目に障害があつて全く光も見えないと知らされる。崖から突き落とされたような気になり、ふさぎ込んでしまった。このままだと自分も、子どももダメになると奮起。障害に関する本を探し、1冊に出合う。福沢美和さんの『フロックスは私の目』だった。盲導犬のラブラドル・レトリバーが表紙にいた。福沢さんも網膜色素変性症で視覚障害。彼女との出会いから道が開く。しかし、音にすごく敏感で、掃除機の音やスピーカーなどの拡声器の音に、火がついたように泣きだす盲目の子を育てるのは尋常一様の苦労ではない。普通には育てなさい」という福沢さんのアドバイス通りに、いろんな所へ連れ出した。美術館にも、花見にも、花火にも。色を教えることが難しかったが、食べることとの関連から、リンゴは赤よ、卵焼きは黄色よ

と教えていった。すると2人で歩いていたとき、伸行君が聞いた。「じゃー、今日の風はなに色？」と。それがタイトルになった。目は見えないうが、明るく感性豊かな子と美しい声を持つ母とが、人との出会いを重ね、国際コンクールで優勝するまでの物語は感動そのものだった。ちなみにお母さんは日経を経て、高橋圭三事務所でのフリーのアナウンサーを経験している。梅檀は双葉より芳し。伸行君は8カ月の頃、ブーニン演奏の「英雄ポロネーズ」がお気に入りだった。母の音が聞こえないと子どもがコミュニケーションをとれず不安そうだったので、お母さんは料理を作りながらも、いつでも話かけたり、歌をうたったりしていた。クリスマスのころ、伸行君2歳3カ月のとき、ジングルベルを歌っていたら、突然、隣の部屋からおもちゃのピアノでジングルベルが聞こえてきた。辻井さんは最初の大きなご褒美をもらった。教えないのに、一人で弾いて、ここまで育ってくれて、と感謝した。その後いろいろあつて6月の優勝、いま母は「私のところに生まれてきてありがとう。私の人生を実りあるものにしてくれて」と。辻井さんは、福沢さんから励まされたように、これから伸行さんと少し離れて、子育てで悩むひとたちに自分の経験を語っていききたいという。

第12回記者研修会



裁判員裁判を取材した記者がパネル討論



「法の日」記者会見に臨む山崎最高裁事務総長 樋渡検事総長 宮崎日弁連会長 (右から)

10月1日 (木)

- ◆ 11:30~13:30
上映と講演 ドキュメンタリー「検事のふろしき」
阿武野勝彦東海テレビ放送報道スポーツ局専門局長 (09年度日本記者クラブ賞受賞者)
- ◆ 14:00~15:30
パネルディスカッション「裁判員裁判」
パネリスト: 恒次徹・読売新聞社社会部司法クラブキャップ、珍田秀樹・東奥日報社社会部次長、井本里士・毎日放送報道局ニュースセンター副部長 司会: 菅沼堅吾東京新聞編集局次長
- ◆ 16:00~17:00「法の日」記者会見
山崎敏充・最高裁事務総長、樋渡利秋・検事総長、宮崎誠・日弁連会長
- ◆ 17:30~19:00 懇親会

10月2日 (金)

- ◆ 10:00~11:30 研究会「日本政治の転換点」
佐々木毅学習院大学教授
 - ◆ 12:00~13:30 昼食会
豊田章男トヨタ自動車社長
 - ◆ 14:00~15:30
研究会「ジャーナリストという存在」
鎌田慧 ジャーナリスト
 - ◆ 16:00~17:30
研究会「新型インフルエンザと報道」
岡部信彦国立感染症研究所感染症情報センター長
- <参加>39社61人
(新聞・通信25社39人 放送14社22人)

● 議論から勇気を 裁判員の守秘義務に悩まされている。制度チェックのためにも踏み込んで聞きたいが、取材相手の裁判員が違反に問われるため、自粛してしまう。パネルディ

小林 太一

茨城新聞報道部司法クラブ

● 「評議」検討機関を 証拠が少なく、立証が困難な事件を裁判員が審理した場合、非公開の評議のあり方を検討する機会が必要ではないか。今後、評議の時間が足りないという声や公判前整理手続きで証拠を調べきれないケースが出てくるかもしれない。評議を検討する機関を設置したり、裁判員経験者にアンケートを実施し、裁判員の感想や意見を制度運営に生かすべきだと思った。

● 「評議」検討機関を 証拠が少なく、立証が困難な事件を裁判員が審理した場合、非公開の評議のあり方を検討する機会が必要ではないか。今後、評議の時間が足りないという声や公判前整理手続きで証拠を調べきれないケースが出てくるかもしれない。評議を検討する機関を設置したり、裁判員経験者にアンケートを実施し、裁判員の感想や意見を制度運営に生かすべきだと思った。

● 録音・撮影—新聞TVで異なる意見 改めて気付かされたのは、裁判所の関与の下で行われ、録音・撮影に大きな制約がある裁判員経験者の記者会見(第1会見)と、補足取材での会見とのバランスについて、新聞社とテレビ局との間で、意見の相違があるということだった。今後の裁判所との交渉で、第1会見の録音・撮影の範囲を広げることで、対立を緩和すべきだという展望を持った。

● 録音・撮影—新聞TVで異なる意見 改めて気付かされたのは、裁判所の関与の下で行われ、録音・撮影に大きな制約がある裁判員経験者の記者会見(第1会見)と、補足取材での会見とのバランスについて、新聞社とテレビ局との間で、意見の相違があるということだった。今後の裁判所との交渉で、第1会見の録音・撮影の範囲を広げることで、対立を緩和すべきだという展望を持った。

● 議論から勇気を 裁判員の守秘義務に悩まされている。制度チェックのためにも踏み込んで聞きたいが、取材相手の裁判員が違反に問われるため、自粛してしまう。パネルディ

小林 太一

茨城新聞報道部司法クラブ

● 「評議」検討機関を 証拠が少なく、立証が困難な事件を裁判員が審理した場合、非公開の評議のあり方を検討する機会が必要ではないか。今後、評議の時間が足りないという声や公判前整理手続きで証拠を調べきれないケースが出てくるかもしれない。評議を検討する機関を設置したり、裁判員経験者にアンケートを実施し、裁判員の感想や意見を制度運営に生かすべきだと思った。

● 「評議」検討機関を 証拠が少なく、立証が困難な事件を裁判員が審理した場合、非公開の評議のあり方を検討する機会が必要ではないか。今後、評議の時間が足りないという声や公判前整理手続きで証拠を調べきれないケースが出てくるかもしれない。評議を検討する機関を設置したり、裁判員経験者にアンケートを実施し、裁判員の感想や意見を制度運営に生かすべきだと思った。

● 録音・撮影—新聞TVで異なる意見 改めて気付かされたのは、裁判所の関与の下で行われ、録音・撮影に大きな制約がある裁判員経験者の記者会見(第1会見)と、補足取材での会見とのバランスについて、新聞社とテレビ局との間で、意見の相違があるということだった。今後の裁判所との交渉で、第1会見の録音・撮影の範囲を広げることで、対立を緩和すべきだという展望を持った。

● 録音・撮影—新聞TVで異なる意見 改めて気付かされたのは、裁判所の関与の下で行われ、録音・撮影に大きな制約がある裁判員経験者の記者会見(第1会見)と、補足取材での会見とのバランスについて、新聞社とテレビ局との間で、意見の相違があるということだった。今後の裁判所との交渉で、第1会見の録音・撮影の範囲を広げることで、対立を緩和すべきだという展望を持った。



研究会終了後も熱心に岡部氏（右）へ質問

一般会員とともに豊田トヨタ自動車社長
昼食会を取材



鋭い質問続く 裁判員裁判、政権交代、経済危機、新型インフルエンザ…。目下の、かつ将来の取材に不可欠な話をわずか二日間で聞けて、得た気分である。どのプログラムでも鋭い質問が続き、予定時間を超えたのも内容の充実さ故だろう。パネルデイスカッション「裁判員裁判」では、守秘義務という取材上の壁をどう乗り越えていくか、会場と一体になって体験を語り合うことができた。進行役として、研修会への参加者全員に感謝したい。

企画委員（研修会担当） 菅沼 堅吾



若手・中堅の記者61人が参加した

- **今と向き合う** 大自民党は死んだ。判断した国民は共犯者だ…。刺戟的な表現が続いた佐々木毅教授の講演を夢中で聴いた。民主党政権へのいら立ち、心配も伝わってきた。個別の政策ばかりで全体をまとめる理念が見えないと。同感だ。国民は政治をダイナミックに動かした。メディアもしつかりとした視点で、今と向き合わなければならぬ。そうあらためて感じた。
 - **信濃毎日新聞論説委員 矢嶋 正幸**
● **会場が静まり返る場面も** 「トヨタ自動車はいま、どん底に近い状況にある」。強い表現で経営の厳しさを説明する豊田章男社長。会場を埋めた300人超が静まり返る場面もあった。かつてない荒波の中での船出だが、言葉一つ一つに力を込める姿から悲壮感はうかがえない。「顧客の側に立って車づくりの原点を見つめ直す」。かじを切る方向は定まりつつあるように見えた。
 - **西日本新聞報道センター 向井 大豪**
● **慣れを猛省** 「企業内記者」「デスクの判断に任せるだけの記者では困る」。鎌田慧さんの講義は、記者生活10年目に入った私にとり、耳の痛い言葉が次々飛び出した。仕事に慣れるに従い、できることとできないことを勝手な思いこみで分別している自分に、あらためて気付かされた。これを機会にしっかりと反省し、今後の仕事に臨もうと思う。
 - **北海道新聞東京支社社会部 松井伊勢生**
● **71歳の現役に学ぶ** 「ジャーナリストという存在」と題した鎌田慧さんの講演。冒頭から「企業内記者」という表現で、一部の新聞テレビ記者には主体性が足りないと指摘した。鎌田さんは徹底した現場主義と独立不羈を貫き、71歳の今も現場を回り続けている。その問題意識は鋭く、まなざしは温かい。「記者は取材相手に会って成長する」との言葉が印象的だった。
 - **テレビ朝日「報道ステーション」ディレクター 武藤 一成**
● **正しい情報の発信を** 新型インフルエンザなどの感染症について、国の施策に科学的な根拠を提供するだけでなく、報道機関を積極的に活用し国民に正しい情報を伝えようと努力されている姿に感銘を受けた。健康被害を最小限にとどめ、社会や経済の破たんを防ぐという共通の目標に向けて、今後も岡部先生から学び、正しい情報の発信に努めていきたい。
- NHK大阪放送局関西空港報道室
西田 剛至

自民党総裁候補討論会

(9・19)



齋藤史郎理事長あいさつから

かつてない逆風の中での自民党総裁選ではないかと思えます。しかし、民主主義が本当に機能するには、強い野党、健全な野党が不可欠だと我々も思っております。そういう意味で、今回野党になった自民党というのは、これまで以上に真価が問われているのではないかと。

ぜひ自民党員だけではなく、広く国民に向けてどう自民党を立て直し、そのために何をやり、どのような形で党を引っ張っていくのか。あるいは民主党政権とどう闘っていくのか。真剣に議論していただきたいと思えます。

速記録クラブHPに掲載



討論会の前に谷垣、河野、西村の3候補が恒例の揮毫を

〔写真 栗田格会員
関連記事17ページ〕



舌戦直後のコメント

■未来か過去の清算か 民主党代表選よりよほど迫力あり。ひとえに河野太郎候補のデイベート上手のおかげか。政権を取る前の民主党、政権を失った後の自民党の討論の違いは、未来を夢見た党か、過去の清算の党か、かな?ともあれ、政権交代は2大政党があつて初めて成り立つ。何年かかっても未来を作るんだという気概のリーダーを選んで、再生してほしい。
総合司会 川戸恵子 (TBS)

■「絆」強調の先には 予想外に本質的な議論が交わされた。米国の共和党的な「小さな政府」論を掲げる河野氏に対して、「絆」の谷垣氏はどちらかと言えば「大きな政府」派か。だが、谷垣氏が求める場所には、すでに「友愛」の民主党がいる。違いを際立たせるのは容易ではあるまい。河野流で割り切った方が、2大政党の棲み分けはすすきりするのだが。
代表質問 宮田謙一 (朝日新聞社)

■人の悪口は… 主役は河野さんだった。彼は討論術が優れている。短いセンテンスで質問を繰り返して、ピンポイントを攻める。また、その場にはいない自民党実力者を名指しして批判する一方、敗北した場合には離党する可能性にも言及した。彼が際立つ分、谷垣さんや西村さんは影が薄くなった。「選挙で人の悪口は言っちゃいけない」というのは過去のことか。

企画委員 田崎史郎 (時事通信社)

研究会 総選挙後の日本

田中 秀征 福山大学客員教授

9・2(水) 司会 倉重篤郎委員
出席 197人

石原 信雄 地方自治研究機構
会長・元内閣官房副長官

9・4(金) 司会 影山日出夫委員
出席 143人

▼「本格」政権の重大な使命



歴史的
な8・30
政権交代
選挙から
3日後。
「総選挙

後の日本」シリーズ第1弾の講演は、「鳩山政権」の意義と課題を浮かび上がらせる、示唆に富む内容だった。1993年の細川連立政権の中枢にいた田中氏は、当時と今回を比較し、共通点より相違点が多いと指摘。鳩山政権の「使命」の重大さを強調した。相違点の一つは、93年は準備のないまま政権が交代したが、今回は十分な準備期間があったこと。二つ目は、背景にある「政治不信」の原因が、前回は「政治腐敗」だったが、今回は「統治構造の劣化」というより深刻な問題であるということだ。そのため鳩山政権に求められるのは、「政治改革」だけで結集した細川政権のような「特命政権」ではなく、山積する政治課題全般に、中長期のビジョンを示しながら取り組む「本格政権」になるとのこと。そ

して「劣化した統治構造」を立て直すため「明確な政治姿勢を示す」必要があると述べた。

鳩山政権にその重い責務が果たせるか。田中氏は、その鍵は逆に93年との共通点にあるとの見方を示した。それは中心にいるのが小沢一郎氏だということだ。

鳩山・小沢関係は「個人的には極めて良好」との見方を示すと同時に、「世論に基盤を置く鳩山」と「組織を重視する小沢」の違いも指摘。判断基準の違いが政策判断の違いに表れる可能性がある」と政権のアクセントに触れた。

「小沢氏は細川政権の経験をしつかりと学んで、鳩山首相の方針を最大限尊重する方針で臨んでほしい」と注文を付け、小沢氏が政権を支える役割に徹すれば「尊敬する大久保利通を上回る歴史的事業を成し遂げることができると述べたのは、危惧の念も含みながら、鳩山・小沢体制に期待感を示すメッセージと聞いた。

共同通信編集委員兼論説委員

川上 高志

速記録 クラブHPに掲載

▼新しい政官関係はどこへ

官僚支配の打破を唱えて政権交代を果たした民主党。その民主党が選挙中に掲げた政治・行政の新しい構想を、政と官の実態に最も精通した一人が真正面から論じた。

自治官僚として34年。その後、竹下・宇野・海部・宮沢の自民党内閣から細川・羽田の非自民内閣、自社の村山内閣までの7年3カ月、首相官邸で官僚機構のトップとして事務の官房副長官を務めた。82歳とは思えないほど、分析は微に入り細に入り、具体的に精緻だった。

「政治主導へ切り替えることには誰も異論がない。私も賛成だ。だが、具体化するなら気になることがある」。こう言いながら、事務次官会議の廃止や国家戦略局の創設といった主要な構想を一つずつ採り上げ、「この構想は本当に動くのか」「動くための



条件は」などと論じた。ただ、123年

間続いた次官会議の廃止では、会議の主宰者だったため、「次官会議は省庁間や与党との調整状況を閣議前に確認するだけ。それでもいけないというなら、何をか言わんやだ」と熱くなった。

官僚が前面に出たのは、「見識や経験を考えず、派閥の論理で順送りに閣僚が選ばれたから」という。官僚が族議員と一緒に抵抗する現象も、「強い指導力を持つ首相が登場した内閣では起きなかった」。だから、政治主導の体制とは結局、「その時々々の政権を担当する政治家の力量で決まる」と断言した。

「独立行政法人や公益法人の中には批判に耐えられないものがある。官僚組織は大いに反省が必要だ。だが、国民生活にかかわる重要な法律は政府が責任を負う。官僚組織をうまく使ってもらいたい。官僚組織を全く排除して政治家だけでやれば、どうしても無理がくる」

これが結論だった。この言葉を、「官の擁護」とみるか、政官関係を作り直す「手がかり」とみるか。

読売新聞編集委員 青山 彰久

速記録・動画 クラブHPに掲載

研究会 総選挙後の日本

おかもと ゆきお
岡本 行夫 外交評論家

9・7(月) 司会 川村晃司委員
出席 183人

さかきばら えいすけ
榊原 英資 早稲田大学教授

9・9(水) 司会 小此木潔委員
出席 222人

▼戦略なき国家には深刻な結果が

鳩山政権発足を十日後に控えて、岡本氏が「祝意とともに、私の期待と懸念」を語った。

滑り出しの鳩山外交を総覧して岡本氏は憂慮を深めているのではないか。「鳩山論文」で米国の知日派の疑心を買った日米関係はますます不透明になった。閣僚からの同盟の根幹に関わる「見直し」「修正」要求は止まらない。首相の国連演説は「友愛」「架け橋」と甘い言葉が印象的で、マニフェスト(選挙公約)遵守の原則論が目立った。



発想や、いかにも野党的な「選挙用」の安保政

策」は、そうそうに修正すべきだと説いていた。インド洋上の給油中止で「テロとの戦い」の戦線から離脱するのであれば、日米関係への影響だけでなく欧州からの批判も覚悟しなければならぬ。地位協定、米軍再編、核持ち込み密約など、日本側の一方的な主張や要求をアピールすることが果たして「対等な日米関係」なのか、との指摘である。

外洋艦隊建設など着々と軍事力を強化する中国の前に、日本は自国の安全保障を何を持って担保するのかとの問いに民主党マニフェストは答えていない。韓国の左派は活動を始めている。アジアの反日イデオロギーは手強い。歴史認識は踏み絵に使われるだろうし、新政権の幹部は過去にさまざまな「言質」をとられてきた。「軸が変わるとはそういうことだ」との民主党の声が聞こえそうだが、岡本氏は「戦略なき国家には深刻な結果がもたらされる」と語った。

幕は上がったばかり。しかし、保守激論で野党自民党は大丈夫か。産経新聞政治部編集委員

久保田るり子
速記録 クラブHPに掲載予定

▼財政赤字より「鳩山不況」に警鐘



「民主」党のサポーターとして「ことわつた上で、

鳩山政権の政権運営への注文をざっくばらんな口調で語り、聴衆を楽しませた。

「いまの景気は二番底になる可能性がかなり高い」とし、「これは何年かたつと『鳩山不況』だなんて呼ばれる可能性もある」と警鐘を鳴らし、今後一カ月ぐらいの間に景気対策を打つべきだ、と力を込めた。

子ども手当など民主党の政策の財源確保に疑問を呈したり、財政赤字の拡大を心配するようなメディアの論調が目立つことについては「マクロ政策を理解していない暴論だ」と、ぼつさり。

榊原氏の目には、そうした議論は金庫番の論理という物差しだけで経済を測っているにすぎないと映っているようである。

麻生政権がつくった危機対策とし

ての補正予算を減額すれば「経済はめちやくちやになる」といい、財源にばかりこだわるのは「全く無責任な議論」「責任感の仮面をかぶつた経済学の無理解であり、経済政策の無理解だ」と、榊原氏は全開。なんだか米国のクルーグマン教授のような論調に。

日本の財政は危機的な状況にはなく、個人金融資産1400兆円から兆出してもどうってことない」と景気優先を説き、無駄の削減は4年間でやればいいと述べた。

政治主導を確立するには「各省の設置法を廃止すべきだ」。そして「厚生労働省のかなりの部分を地方自治体に移していい」「文科省の権限も相当に分権したら」と、大胆な発言は止まらない。

国家戦略局の仕事に就くつもりはあるかとの質問には「そういうオフアアがあれば考えてみたいが、実際に(物事を)動かせない立場なら、野にいて意見を言うほうが影響力がある」と煙に巻きながら、エネルギーシユな会話を締めくくった。

朝日新聞論説副主幹 小此木 潔

研究会 総選挙後の日本

飯田 哲也 環境エネルギー政策研究所長

9・9（水） 司会 瀬川至朗委員
出席 83人

▼25%減実現へ2つの提言



首相就任を間近に控えた鳩山由紀夫氏が9月7日、国内の温暖化

ガスの排出を2020年までに1990年比25%減らす新たな目標を表明したことは、国内外で波紋を呼んだ。国内では産業界が「厳しすぎる目標」と反発し、国外ではEUなどが「野心的な目標」と歓迎した。

この目標は本当に達成できるのか。できるならば、どんな手段で実行するのか。メリット、デメリットは何か。多くの人が抱くであろう疑問に、飯田氏は「実現可能」の立場から、必要な対策や政府の政策決定過程の改革の具体案を挙げながら説明してみせた。講演は25%減の目標を実現するために、乗り越えるべき課題を浮かび上がらせたように感じた。飯田氏は過去の公害問題の反省から、自動車の排ガス規制をした結果、競争力強化につながった例を紹介。今後も国内排出量取引制度や環

境税などの規制をすれば、環境産業の成長や、既存企業のグリーン化が進むと主張した。

一方で、熱波やハリケーンが頻繁に起き、地球温暖化が我々の日常生活に被害を与え始めているとも警告。太陽光パネルや次世代自動車の購入を「負担ではなく、消費・投資として考え、温暖化の進行による将来の大きな被害を避けるべきだ」と意識改革の重要性を訴えた。

飯田氏の2つの提言がこれまで実現していないのはなぜか。①排出量取引などで規制すれば、日本の産業界にどうプラスになるかという具体像を、産業界も削減推進派も描けていない②多くの国民が地球温暖化を身近な問題としてとらえていない——の原因があるように思える。

鳩山新政権が誕生し、25%減の目標を実現するための検討が始まった。そのためには産業界や家庭、運輸など各部門での強力な取り組みが欠かせない。この原因の解消が、目標達成に現実味を持たせる推進力となるのではないか。

日本経済新聞経済金融部 竹内康雄
速記録・動画 クラブHPに掲載

湯浅 誠 反貧困ネットワーク事務局長

9・10（木） 司会 菅沼堅吾委員
出席 76人

▼関心は尊重につながる

「政治が人間の手触りを忘れていく。湯浅さんの言葉は、いつも強く心に響く。この日も、具体的なデータや事例を交えつつ、力のある発言が続いた。」

まず、新政権に何を期待するか。「今回の選挙では、経済成長をすれば生活がよくなるという話はずんざりだ」という人たちが投票した。この人たちに家計の立ち直りをどう実感してもらうかだ」

具体的に求めたのが、貧困率の測定だ。「日本政府は、貧困率の数字を認めていない。だから、出発点も目標数も定まらず、子どもの貧困が増え続けている」。同じように子ども

の貧困が問題になったイギリスでは、「90年代から当時のブレア首相が、子どもの貧困を04年までに4分の3、10年までに半分、25年までに撲滅」と、25年計画で減らし続けている。「命だ、生活だ、というのなら、それ



「命だ、生活だ、というのなら、それ

に沿った政治を。ダメなら、この政権でもダメだといわざるを得ない。次の選挙で国民の審判が下るだろう」ただ、政治に任せるだけではないところが、派遣村などの活動を通じて、政治や行政を動かしてきた湯浅さんだ。「私は現場の活動家。お手並み拝見というわけにはいかない。私たち国民も、よりよくなるよう、働きかけていくしかない」

ゲスト帳に残した言葉は、「関心は尊重につながる」。「見えないことが無視につながり、逆に関心は尊重につながる」というアメリカのジャーナリストの言葉からの引用だ。今、日本で何が起きているのか、関心を高めていくためのメディアの役割も、改めて問われている。

いつものように、冷静に理路整然と話し終えた湯浅さんだが、「活動家」としてホームレスの人たちに話しかけるときには、「そろそろ、行きましょっかあ〜」。飲み仲間のおじさんと話しているかのような優しい語り口とまなざしに変わる。本物だと思ふ。

NHK解説委員 後藤 千恵
速記録・動画 クラブHPに掲載

研究会 総選挙後の日本

寺島 実郎 日本総合研究所会長

9・11(金) 司会 橋本五郎委員
出席 257人

▼対米関係の再設計を



鳩山民主
党政権のブ
レーンの1
人と目され
る寺島氏の
語った内容

は、日米関係から米中関係、中東問
題まで多岐にわたった。

氏は、まずイラク戦争とサブプラ
イム問題で疲弊した米国から語り始
め、「世界秩序の中核を支えてきた
米国の求心力が急速に低下」してい
る世界の現況を説いた。

次いで視点を日本の貿易構造の変
化に移した。日本の貿易総額に占め
る米国の割合が、1990年に27・
4%だったのが、09年上半年は13・
7%まで低下し、代わって中国
(20・4%)、中国本土に香港、台湾、
華僑が多く在住するシンガポールを
加えた「大中華圏」(30・1%)が
伸張していると指摘した。否が応で
も中国と向き合われないといけない日
本の現状を訴え、データを駆使した
その説明には説得力があった。

さて政権が交代した日本の進むべ

き道だが、氏は、今こそ冷戦構造を
清算し「相対化する日米中の力関係
の下で、対米関係も再設計し直す時
期である」と説く。大いに納得でき
る主張で、日本をこれまで「米国の
周辺国」としていた諸外国の見方を
改めさせる好機だと、私も思う。

さらに共感したのは、質疑応答で
「ルールを作る側にいる」ことの重
要性を説かれた時だ。

昨年11月に施行された英国の温暖
化対策「気候変動法」の説明を在日
英大使館で受けたことがある。気候
変動が英国に及ぼすリスクを査定す
る義務を政府に課すなど一定の法的
拘束力を持つ枠組みだ。金融危機で
日本より厳しい経済状況にあるにも
かかわらず、大使は「これで新しい
事業、雇用、輸出機会が創出できる」
と胸を張ったのが印象に残った。こ
の分野で先鞭をつけ、交渉を主導し
たい英国の思惑は明らかだった。

ルールの遵守が得意で、変更のた
びに必死に順応してきた日本。だが
もう十分だ。早くルールを作る側に
立ちたい。切に思った。

毎日新聞政治部副部長 山科 武司
速記録・動画 クラブHPに掲載

松本 正生 埼玉大学教授

9・3(木) 研究会「世論調査」④
司会 川戸恵子委員 出席 80人

▼世論調査へのエール

松本さんは今、世論調査研究の第
一人者で、メディア各社の世論調査
に精通している。このため、新聞社
の調査担当者としては、テスト(8
月の衆院選情勢世論調査)の採点結
果を告げられる学生のような心境で
講演を拝聴した。

松本さんはまず、「世論調査は今、
かわいそうだ」と切り出した。理由
は2つ。「マスコミ各社が世論調査
を酷使しているから」「一般の人た
ちは調査結果をもてはやすのに、調
査対象になったら回答するのを嫌が
るから」という。電話方式の世論
調査が定着して以降、新聞、通信、
テレビ各社の調査回数は激増した。
一方、調査対象者は「振り込め詐欺」
などへの警戒もあって電話での応対
に消極的で、回収率は高くならな
い。そうした日本の世論調査の実情
を端的に指
摘した。

話はこの日
の核心部分
に入ってい

速記録・動画 クラブHPに掲載

く。衆院選でのメディア各社の情勢
調査に関してだ。

新聞各社は調査結果の掲載の早さ
を競い、調査時期は選挙の度に前倒
しされる傾向にあった。今回は複数
の新聞社が公示日から調査を始め
た。松本さんは、これについて「R
D D(電話世論調査)による祭りは
行き着くところまで行った」とチク
リ。そのうえで「当事者は他社が先
に紙面化したらやりきれないのかも
しれないが、世の中の人はまったく
気にしていない」「今回のような荒
っぽい結果の選挙なら(調査の)精
度はあまり問われないが、今度は問
われるかも」と苦言を呈した。

さらに、情勢調査が有権者の判断
に影響を与えるアナウンス効果に関
して「最近、勝ち馬に乗れ効果が
多いと思う。判官びいき効果は少な
くなった。自分を多数派に置きたい
心理が強いためだ」と解説。「各新
聞社の世論調査結果が『世論』にな
る。だから、新聞社の情勢調査は微
妙に外れる方がいい」と語った。

「学生」は少し気が楽になった。
毎日新聞世論調査室長 福井 明

マルティナス・ファン・スカルクウイク 南アフリカ観光相

9・17(木) 記者会見
司会 坂東賢治委員 通訳
長井鞠子 出席 41人

▼南アの魅力も体感してほしい

来年6月のW杯開催を控えて注目度が高まっている南アフリカ。建設労働者のストによるスタジアム建設の遅れや1日平均50件の殺人事件が起る治安の悪さなどネガティブな話題ばかりが取りざたされる中で観光大臣の会見は興味深かった。

W杯南ア大会は世界で延べ350億人がテレビ観戦し、大会期間中に約45万人の外国人が南アを訪れると見込まれている。まさに世界中の人々の目が南アに向く。マルティナス観光相は熱く、そして真摯に厳しい質問の1つ1つに答えていった。

「スタジアムは11月までにはすべて完成、12月には国際サッカー連盟(FIFA)のブラッター会長が視察する」。インフラ整備に約3400億円を投資、600億円の経済効果を見込んでいる。2002年W杯の日本での経済効果が3700億円で約1・6倍だ。ホテルも10万室が用意



され、治安も19万人の警察官を配置する。南ア政府がこの大会にどれだけの力を入れているかがよくわかった。

「最高級のホテルも近代的な道路や鉄道、空港もある。南アにきてアフリカを感じ取ってほしい」と大会成功へ自信を見せる。「昼間は野生のゾウやサイを見て、午後はW杯を見て、夜は本物の野生のブッシュを見てほしい」。サッカーだけでなく南アという国の魅力を体感してほしいと訴えた。

南アは日本からの直行便がなく、乗り継ぎで空路17時間かかる。8時間の時差もあって日本からの観光客はそう多くないが、来年が外交関係樹立100年で日本との関係は深い。

98年W杯フランス大会を取材したが、世界から人が集まって交流し、人生観が大きく変わった。12月4日のW杯抽選会で日本の対戦国が決まれば大会も盛り上がりつつあるはず。観光相の話聞いてますます南アにいきたくなってきた。

スポーツニッポン新聞編集委員

大西 純一

清水 学 帝京大学教授

9・18(金) シリーズ研究会「ユーラシア」⑧
司会 石郷岡建委員 出席 35人

▼カシミールから見たアフガン問題



近年、米国を中心に「アフガニスタン」の問題はパキスタン問題と一体で解決を目指すべきだ」との見方が増えている。イスラム教原理主義集団のタリバンは国境を越えてパキスタン領内に多数逃げ込んでいるから、同国領内でもテロ掃討作戦を展開しないと効果が乏しいとの主張だ。

清水教授はこれに異論を唱える。パキスタンをアフガン対策の付属物と見るのではなく、パキスタンにとっての戦略的優先順位がどこにあるかに目を向けると言う。

すると景色は変わってくる。パキスタンはインドとの間でカシミールを巡る領土紛争を抱えている。パキスタンにとっては対インド関係こそが第一の課題で、アフガンの方が従属物となる。インドとの新たな紛争に備えるため、パキスタンは後背地であるアフガンに親パキスタン政権

が欲しかった。だから同国の軍部はタリバンを自ら育てた――。

こうした事情を知っていると、9・11事件以降、米国がパキスタンに突きつけた「アフガン対策の前線基地になれ」との要求がいかに厳しいか、パキスタン国内の政治情勢がなぜ混迷の度を深めているかが分かる。

パキスタンは自国内のタリバン居住地域に手を出せない。それどころか、最近では同地域のタリバンがパキスタン政権を攻撃目標にし始めたのではないかと、教授は危惧する。

オバマ米大統領が危機対策の力点をイラクからアフガンに移すと言いつつ、具体策がなかなか見えてこない理由もこの辺にうかがえる。

それにしても、ユーラシアはやはり地続きだと感じる。タリバンを含むアフガンの主要民族パシクトゥン人が2つの国にまたがって住んでいる事実は、19世紀に決めた国境線のいい加減さを物語るとともに、日本人にとってこの地域を理解する難しさを示している。

日本経済新聞編集委員

栢 俊彦

保坂 修司 近畿大学教授

9・28(月) シリーズ研究会「ユーラシア」
司会 宮田謙一委員 出席 61人

▼アルカイダの弱体化と分散



自爆テロに
向かう直前、
仲間と笑顔で
語り合う若
者。悲壮感や
絶望感は全く

感じられず、達観したような表情で死地に向かう。講演で流された動画には、国際テロ組織アルカイダにリクルートされた自爆犯らの犯行直前の様子が収められていた。

欧米からの2次資料は原則的に使わないという保坂氏は、アルカイダ系組織やアフガニスタンの反政府武装勢力タリバンなどのサイトを定点観測。アラブ紙などを読み込み、日本国内からでもできる最大限の方法でテロを見詰めてきた。そこから浮かび上がったのは、アルカイダ本体の弱体化と各地への分散だという。イラク戦争以降も米軍や政府標的のテロが頻発したサウジアラビアやクウェートでは、当局による弾圧が成功しテロは沈静化。アフガン・パキスタン国境地域に潜伏する指導者ウサマ・ビンラディンらの「本体」

には、ジハード(聖戦)への参戦を目指すアラブなどの若者らが今も続々と集まっているが、資金難のために武器供給が停滞。前線に送り込むことができず、若者らは不満を抱えて投降、帰国しているという。

一方で、ソマリアやイエメンではアルカイダ系勢力が増長するなど地域的な多様化が進む。自爆犯の画像やビンラディンらの声明ビデオに留まらず、CGでテロの様子を再現するなどインターネットを使った「電脳ジハード」も格段に進化。保坂氏は「指導者層や武闘派にとどまらず、オタクと言える人々も多数参加している」と話す。自爆犯の人生をまとめた「殉教者列伝」も広く流布し、新規募集の一助となっている。

パレスチナやタリバンなどの自爆犯はイスラエルや米国への怒りや苦しい生活への絶望を理由に自爆テロに及ぶが、アルカイダの若者は死ぬことを前提に異国に向かうという。保坂氏はその背景にアルカイダの若者の中に「死へのあこがれ」や「死ぬことの美学」があると指摘した。

共同通信外信部

遠藤 幹宜

動画 クラブHPに掲載予定

OECD対日経済審査報告書
ランドール・ジョーンズ シニアエコノミスト

9・30(水) 記者会見
司会 広瀬和彦委員
通訳 池田薫 出席 56人

▼「出口戦略」は慎重に

「百年に一度」の金融危機。米証券大手のリーマン・ブラザーズが経営破綻し、世界の緊張が一気に頂点に達した昨秋から1年が過ぎた。危機は去ったか。景気はいつ回復するのか。日本経済の分析や提言をまとめたOECD対日経済審査報告書の公表に併せて来日したジョーンズ氏が記者会見で示したのは、生きた経済の行方を見極める難しさであり、難しさゆえの慎重姿勢だった。

この1年間、対岸からの火の粉は、リーマン・ショックを「ハチが刺した程度」と評した大臣(当時)がいる極東の国にも否応なく降りかかった。「ハチ」発言はその後修正されていた。経済成長は戦後最悪の水準に急落。株価はバブル後最安値を更新し、当記者クラブと道路をはさんだ向かいの公園には、失業者らを支援する臨時テント村もできた。



しかし、いつしか

自由落下の恐怖は消え、世界は夜の底を語り始めた。ほのかな明かりに一喜一憂を繰り返しながら、今や最大の関心事は、財政・金融両面による景気刺激策からの「出口戦略」に移りつつある。

これに対しジョーンズ氏は「(世界経済には)この先も多くのリスクや不透明要因が潜んでいる」とした上で、日本のデフレ懸念は依然として払拭できず、「出口戦略は努めて慎重な対応が必要だ」と強調。

もはや「待ったなし」を通り越した感の強い財政再建についても、「景気刺激策の打ち切りをはやまってはいけない。たしかに財政は憂慮される状況だが、現在の不況を脱却するほうが先決だ」と述べ、あり得べき拙速に警鐘を鳴らした。

ジョーンズ氏の発言は終始抑制が効いたトーンで、ややもすると経済が近く持ち直すことを前提に描いた先の話ばかりが目立つ報告書の文字面とは異なる印象を受けた。出口の準備は必要だが、着手について云々する時期ではない。報告に通底する認識を確かめる良い機会だった。

時事通信外国経済部

妹尾 優

ヴィヨンの妻

『桜桃とタンポポ』(9・25)

初めに「あれれ」と思ったのは、原作である太宰治の短編『ヴィヨンの妻』に、他の短編がミックスサンドイツチのように挟み込まれていることに気づいたときのことだ。

原作は、小料理屋の夫婦が真夜中に、詩人である大谷の自宅にやってきて「店から盗んだ金を返さないのなら、警察に訴える」と詰め寄るところから始まる。妻が小料理屋で生き生きと働くようになる。で、「人非人でもないじゃないの。私たちは、生きていさえすればいいのよ」という妻の前向きな言葉で終わる。

映画は、その間に他の太宰作品のエピソードを次々、挿入する。『灯笼』からは、小説家・大谷(浅野忠信)の妻である佐知(松たか子)が、万引きをして取り調べを受けた過去を回想するシーン、『姥捨』からは、大谷が愛人の秋子



太宰短編の世界を堪能

(広末涼子)と心中未遂をするシーン、といった具合だ。

そんな手法で、痛みやすいけれど甘みのある「桜桃」のような男・大谷と、どんな環境にも適応し誠実な美しさを持つ「タンポポ」のような女・佐知との関係を巧みに描く。

太宰ファンにはこたえられない筋立てだ。生誕100年にふさわしい作品といえる。ただ、テンポのいい展開に引きずり込まれていくと、いつしか妙な期待感に包まれる。太宰の世界を描いたものだから、破壊へと向かい、とんでもない最終章が待ち受けているのではないか。

でも、しかし。映画は原作に戻り、妻の前向きな言葉で締めくくられる。最後にまた「あれれ」という気分を襲われたのだ。

芸達者な俳優をそろえた。特に松たか子と、広末涼子、それに小料理屋の妻役、室井滋ら女性陣がそれぞれ独自の味を出している。その演技には「へーっ」と感心した。

日本経済新聞特別編集委員 足立 則夫

©2009フジテレビジョン
パバドゥ 新潮社 日本映画
衛星放送



夢破れたため息の向こうは

メラで記録する。ノスタルジアの旅ではない。夢破れた現実を知る。同級生の多くは出国してしまった。残った友達の子供時代を「なんでもかなうように思えた」と振り返る。でも、今の暮らしとなると口が重い。

ソ連の援助が平等社会のユートピアを可能にした。まさにサトウキビのカーテンで守られていた。ソ連が消えると、物不足に見舞われ、ドルがないと何も手に入らない。そのころキューバを取材した私にも「今は二つの世界がある。ひとつは外貨、もうひとつは自分たちのお金」という彼女のため息はよくわかる。

ただ、カストロ政権を単純に非難する映画ではない。「世界中でキューバについて両極端の見方がある。でも実際はもっと複雑です。外国で暮らし、キューバにまだ残る価値観を改めて知り、戻りたいという人もたくさんいる」。2007年のリマ映画祭で監督はそう語っている。

ハバナの映画祭では最優秀賞を受賞した。東京在住のキューバ人はいう。「破壊ではなく、改革のための批判なら私たちは受け入れる」。ため息の向こうにキューバならではのモデルは見つかるだろうか。

日本記者クラブ事務局長 中井 良則

シュガーカーテン

(9・9)

政権交代 鳩山新内閣

政治部 政権移行チーム

朝刊最終版「全閣僚リスト」で完勝

▼伊藤 俊行
(読売新聞政治部次長)

第一報は応援組からだった。9月15日午後1時過ぎ。社民党の福島党首に民主党の鳩山代表から電話がかかってきた。その場に居合わせた記者数人の中に、〓レンタル〓

中の地方支局の若手がいて、「福島さんに鳩山さんから電話です」の情報伝えてきた。

ただちに、政治部の社民党担当が追加取材し、福島氏が「消費者・少子化・男女共同参画・食品安全」の



組閣後に恒例の記念撮影 (9.16 官邸) 読売新聞社

4ポストを兼務すると確認、夕刊最終版に突っ込むことができた。

〓レンタル〓の若手記者が大活躍

政権交代が確実と分かった8月の段階で、政権移行に伴う多くの混乱を予想した政治部は、地方部や他本社に応援を要請し、人海戦術で臨む算段を立てた。大阪、西部などから1カ月間、入社5年前後の若手記者数人が駆けつけ、東京管内の地方総支局からは2週間交代で計約20人を借りた。通常より15人程多い態勢を1カ月間維持できる計算だ。

鳩山氏が「未知との遭遇」と表現した今回の政権交代は、取材する側でも手探りが続いた。政局報道で頼りになるのは経験と勘であることは同じだとしても、最終判断で必要な情報を、どこから、どれだけ集めればいいのかという「相場観」がない。そこで、情報の網を広げ、それぞれ、どれだけ実際の動きにつながる

かを観察し、情報源の信頼性を測ることから始めた。その見極めの間に、失敗する場面もあったが、とにかく走りながらやるしかなかった。

これまでの自民党政権でも、「首相交代」の際は政治家の動きを追うだけでなく、組閣に備えた資料収集など膨大な作業が必要だった。その中で、限られたリソースをどこに投入するかは常に悩みの種だ。

その意味で、応援組の存在は大きかった。冒頭の話のような成果もあったし、若手たち自身も「支局では経験できなかった取材ができて面白かった」と、「お祭り」を楽しんでいた。一挙両得の感があった。

小さな既知をつないで…

一方、手探りではあったが、それなりの見通しもあった。

自民党のような派閥推薦もなく、鳩山氏が一人で閣僚を決めるやり方は、小泉元首相の手法を思い出させるが、鳩山氏の言動や性格を考えると、そこまでの独断専行はなく、いずれ、誰かに相談するか、事前に打診するだろうと考えた。その時、ある程度の情報は取れるはずだし、一定の情報が確認できれば、あとは転がっていくとも期待していた。その時、カギとなるのはチームワークだ

とも考えていた。

結果的に、組閣当日の16日付朝刊の最終版では、すべての閣僚の顔写真にポストを明記して報じることができた。その日の夕方、平野官房長官が閣僚名簿を読み上げるのをテレビで見ながら、「ポスト差し替えないか」という不安と、「差し替えのための調整にエネルギーを費やす余裕は鳩山首相にない」という読みが交錯したが、朝刊既報の人事の正しさは証明された。

「未知との遭遇」に身構えてはいしたが、すべて未知だったわけではない。一つ一つは小さな既知を結びつけて、その方向が間違っていないか吟味し、新政権の姿を浮かび上がらせることができたのが、成果だったと思える。

民主党は「記者会見のオープン化」などを掲げ、メディアとの新たな関係作りを模索している。「政府・与党の一体化」や「官僚依存からの脱却」などの方針は、取材する側にも変化を迫っている。そんな新政権にどう対峙していけばいいか、今回の取材を通じ、一つの答えを得た気がする。チームワークが従来以上に重要になる、という答えを。

いとうとしゆき 1988年入社 政治部で官邸 ワシントン特派員など 2009年4月から政局担当デスク

政権交代 鳩山新内閣

首相番 主が変われば

なんだかいい感じ…

▼比嘉 杏里
(共同通信政治部)

歴史的な政権交代に伴い国会も霞が関も大きく様変わりするようだが、首相の行動を細かく記録する首相番の仕事にほとんど変化はない。ただ、取材対象者が麻生太郎前首相から鳩山由紀夫新首相になったことは、番記者にとっても劇的な「チェンジ」だった。ぶら下がり嫌いの麻生前首相。だれにでも丁寧な鳩山新首相。9月14日、麻生前首相最後のぶら下がり。この日は民主党の鳩山代表との会談があり、質問は「どのような話をしたか」。答えは「個別の会談内容を外にしゃべったことは1回もありません」。結局かみ合わなかった。政治部1年生の記者に政局や支持率についてあれこれ聞かれ、首相が「何を偉そうに」と不快に感じるのはある意味当然だ。ただ「テレビ画面の向こう側には大勢の有権者がいるのに…」と気になることもあった。夜は自民党議員や後援者、秘書官と外食。公邸へ直帰することはほとんどなかった。ホテルなど出入りの

多い場所での会食では、同席者が確認できず泣かされたことも。

一方、鳩山新首相の初ぶら下がりには政権交代翌日の17日。記者やカメラの数の多さに一瞬はにかんだ表情を浮かべたが一問一問きちんと答え、番記者にまで「お疲れさま」と声をかける姿は好感度が高かった。

夕食は幸夫人と一緒。これは特に女性記者に受けがいい。休日はラフな格好をして夫婦で手をつないで歩くのも新鮮だ。新政権発足から2週間弱、首相番記者としては「なんだかいい感じ」の日々を過ごしている。

だが油断はできない。非自民連立政権を率いた細川護熙元首相も最初は非常にフレンドリーだったが、政権末期になると当初の愛想の良さはどこへやら…という話を先輩から聞いたことがある。鳩山首相が急変しない保証はもろくない。

ただ今後、どんな苦境に立たされても、相手の目を見て穏やかに話す首相であってほしい。そして番記者としては、首相に直接質問できる貴重なぶら下がりや無駄にしないために、日々知識を蓄え感性を磨かねば—と思っている。

ひが、あんり 2005年入社 09年5月
から政治部首相番

文科省クラブ 毎日が未知との遭遇

「報」の変化も迫られる

▼中澤 佳子
(東京新聞社会部)

「これって政治主導の第一歩？」
9月17日午前1時少し前の、文部科学省の会見室。川端達夫・新文科相の就任会見を控え、記者たちがさざやいた。大臣が立つ両脇に設けられた同省幹部らの席が、なくなっていたからだ。

「前から変えたかった。イメージも悪いからね。大臣の指示じゃないよ」と同省の広報担当。会見室に入ってきた川端文科相は、隅で見守る官僚たちに目もくれず、記者の質問に答える。想定問答のメモを脇からスツと大臣に渡し、満足げにうなづく官僚。答えに詰まると「どうなの？」と官僚に答えさせた大臣「今までの光景と、すっかり変わった。

政権交代は、報道にも変化を迫っている。事務次官や長官ら官僚の会見中止もその一つ。抗議文を出して復活を求めたり、懇談の形で取材の場を要請した記者クラブもあるが、文科省ではまだだめどは立っていない。議論を尽くさないまま、報道が「政

治主導」で変えられては、かなわない。

川端文科相は「政策判断が伴うものは、政治家が責任を持って情報発信する。情報を出さないわけではない」と説明する。政治主導を逆手に取った取材規制や官僚の委縮につながりかねないが「そういうことがないようにする」と明言している。

それでも、官僚たちは戸惑いを口にする。文科省には、学力テストをはじめ社会的に関心の高い調査の公表が多い。結果に対する省の見解や、政策にどう生かすかレクで質問があった時に、どうするか。一般公開されている中央教育審議会や有識者会議で、どこまで話していいのか。官僚の一人は「どこからが『政策判断』になるのか、分からない。これじゃ何も話せない」とため息をつく。

政、官、そして「報」も転換点に立つ今、毎日が未知との遭遇。貴重な経験だ。歴史のうねりの中で何が変わったのかはもろろん、どんな議論がどれだけ積み重ねられたかも、つぶさに拾い集めて記していかなければ、と思う。

なかざわ・けいこ 1998年入社 文科省は2008年夏から担当

タイムマシンに乗った日々

日本最長の日記



宮武 剛

ニユースは「アイウエオ」と我流の定義をしていた。アッと驚く、イヤーすごい、ウっそーと言いたくなる、エッと絶句、オーと感動である。

しかし、それだけでは映像メディアには太刀打ちできない。活字メディアは「カキケケコ」を加えたい。解説、記録性、詳しく検証、見解を打ち出し、今後どうなるか、も予測する。

● 訃報から始まった残業

非力な記者であった私には「アイウエオ」と「カキケケコ」を両立させた体験は数少ない。ただ、日常の仕事とはかけ離れた分野で、その機会を得たことがある。

社会部のサブデスク時代、当番日の夕刊で一人の元軍人の訃報に接し

た。遠藤三郎・元陸軍中将である。関東軍参謀副長や航空兵器総局長を歴任し、戦後は開拓農民へ転じ、そのかたわら日中国交回復に尽力した異色の人物であった。

当日の加藤順一デスクが「あの人の日記はすごい内容らしいよ」とつぶやいた。すぐ動くのが社会部育ちの性なのだろう。二人で埼玉県・狭山市のご自宅を弔問した。ご家族に日記を拝読させてもらえないか、と頼んだところ、「生前から外への持ち出しは厳禁でしたが、書庫で読まれるなら」と許しを得た。

それから1年余の狭山通いが始まった。夕刊番と朝刊番を各2日連続し、明けと休み。その間を縫って通うのは辛かったが、明けと休日返上・寝不足・視力低下の値打ちは十二分

にあった。

● 11歳から91歳まで80年余

日記は、日露戦争勃発の明治37(1904)年から始まる。

八月一日(月) 寒暖計八十五度(華氏) 晴天、但し午後二時より三時半まで曇り『朝五時三十五分に起き、かおをあらい、めしを食べ、裏の畑にて、かみきり虫を一匹取り、父上に上げ』くく

この几帳面な記録が延々と昭和59(1984)年10月、91歳の天寿をまっとうする1カ月前まで続くのだ。

近・現代の長大な日記には、永井荷風の「断腸亭日乗」(43年間)や政治学者の矢部貞治日記(45年間)がある。もちろん長さだけでなく歴史的な価値が問われる。

山形県の置賜盆地に生まれた遠藤三郎は、陸軍幼年学校、陸軍士官学校、陸軍大学のすべてを首席で終え、参謀本部作戦課勤務からフランス駐在武官へ、エリート軍人の階段を駆け上がったいく。

「15年戦争」の起爆剤となる「満州事変」時には、真相を探るため参謀本部作戦課員として現地へ派遣され、郷土の先輩でもある関東軍作戦参謀・石原莞爾から極秘文書を手渡された。謀略によって満州の奪取を図る「対滿要綱」である。表紙に「用済焼却」とあるが、遠藤は日記と共に大事に保管していた。

日本が火だるまになっていく時代、遠藤は常にその渦中にいた。関東軍作戦参謀く大本営幕僚く関東軍参謀副長く第三飛行団長く航空兵器総局長官。

日記には、日常の雑事と歴史的な体験が入り混じる。謀略の渦巻く満州国の実相、二・二六事件の反乱軍将校との対話、ノモンハン惨敗の後始末、加藤隼戦闘隊を従えたパレンパン襲撃、内乱のような陸海軍の暗闘、特別攻撃隊編成の経緯く。

著名な将官の言動に加え、無政府主義者の大杉栄らを殺害した甘粕正彦との不思議な付き合い、細菌戦を指揮した軍医正、石井四郎との出会

私が会った
倍賞千恵子さん

リレー
エッセー⑪

“下町の太陽”にアタック 事件記者たちが招待

▶ 岩垂 弘

1964年10月1日。東京の両国駅に近い警視庁本所署の署長室。そこへ、倍賞千恵子さんは一人でやってきた。
本所署には、警視庁第七方面本部管内を担当する各社の記者が常駐する記者クラブが置かれていた。「下町記者クラブ」と名乗った。私は朝日新聞社会部からそこに派遣されていた。
当時、同管内では事件が多く、私たちは連日、その取材に追われた。が、時折、平穏な日があり、



下町記者クラブ員と懇談する倍賞千恵子さん 隣が筆者 1964年10月1日 本所署の署長室

そんな日は狭くて暗い記者クラブで時間をつぶすほかなかった。午前10時から夜10時までそこで過ごすのは退屈極まりなかった。
9月に入ったころだ。その日も事件がなく、クラブ員は暇をもてあましていた。すると、毎日新聞の瀬下恵子記者が叫んだ。
「倍賞千恵子さんに来てもらおうじゃないか」
彼女は当時、新進の女優であり、歌手でもあった。『下町の太陽』という歌が大ヒットし、彼女主演で映

私たちは署長室を借り、コーヒーとケーキで彼女と懇談した。感謝状を渡したが、そこには「あなたは、『下町の太陽』で下町の良さを全国に知らしめた」と書かれていた。それから、太陽をかたどった丸いガラスの盆を贈った。
当時、彼女は23歳。それはそれは美しかった。「きれいだな。こりゃ、掃きだめに鶴だ」。クラブ員から、そんなため息がもれた。これには後日談がある。9年後、私たちは倍賞さんと再会する。彼

画化もされた。今ふうには、人気が昇中のアイドル。
「記者クラブとして感謝状を贈ろうじゃないか。彼女、下町の出身だから」と瀬下記者。クラブ員はみな仰天した。「こんなむさくるしい所に来るわけがない」。だれも相手にしなかった。
ところが、彼女は私たちの前に姿を現したのである。瀬下記者によれば、松竹本社に電話したところ、最初は難色を示したが、どうしてもと粘ったら、「行かせましょう」と言ったという。



いわだれ・ひろし
会員（元朝日新聞編集委員）

女が出演した映画『男はつらいよ』シリーズが大ヒットしたことから、かつての下町記者クラブ員から「また会いたい」との声が上がった。彼女を再び招いたので。今度は山田洋次監督、寅さん役の渥美清さんも一緒に。
1973年12月16日、銀座のレストラン。あの健気な「下町の太陽」娘は大スターに変身していた。が、署長室での初対面で感じさせた清楚で庶民的な雰囲気は失ってはいなかった。事件記者との再会をとっても喜んでくれた。
以来、私は『男はつらいよ』を欠かさず観てきた。スクリーンに「さくら」が登場すると、私は心の中で声援を送った。
私は、この「珍事」から教訓を得た。時には突拍子もないことを考え、果敢に挑戦してみることもだ。そしたら、思いがけない出会いがあるかもしれない、という教訓である。

MYBOOK MYPR

血の政治 青嵐会という物語

河内 孝

(毎日新聞出身)

青嵐会の軌跡 血判で契りを交わし、武道館で決起集会を行い、全国紙に意見広告を出した。いつでも口角泡を飛ばし、胸ぐらをつかみ合い、灰皿や瓶を投げつけ、野蛮な極右とメディアに酷評された。1970年代半ば、戦後政治上未曾有の熱さと厚かましきで一躍脚光を浴びた政治集団「青嵐会」。今、政治に求められている「何か」が彼らにはあった。太く、短く、謎多きその軌跡をあらためて現在に問う異色ノンフィクション。(本書カバーのことばから)

(新潮新書 735円)

民主党が約束する99の政策で日本はどう変わるか?

神保 哲生

(ビデオニュース・ドットコム)

民主党の政策の全体像と理念を徹底分析 マニフェストは選挙用の広報資料であり、そこからは民主党の政策の本質は見えてこない。本著は過去に民主党が提出してきた法案や政策提言をもとに99の主要政策を徹底

検証した上で、その底流にある理念を浮き彫りにすることを試みている。その民主党が政権の座について今、これまで提案してきた政策を実行に移すことを監視する意味でも、ぜひ多くの人に活用してほしい。
(ダイヤモンド社 1,500円)

サイゴンの火焰樹 もうひとつのベトナム戦争

牧 久

(日本経済新聞出身)

サイゴン革命の記録 面映いので、最近、楽天の商品ブログにのった一読者の声を紹介する。「元ベトナム特派員のサイゴン陥落後、数カ月の記録である。北ベトナムの占領下、情報鎖国の中にあつて、非常手段で日本に送信した記事を挿入している。ベトナムの実態を描いた本は多いが、国外強制退去の最後まで残った日本人記者の記録は貴重である。(中略) また、当時のベトナムの宣伝にのせられず、それを掲載した日経新聞にも骨があった」。陥落後、閉ざされた国で何が起きたか。それを記録に残したかった。

(ウエッジ社 2,520円)

会議報告

第184回施設運営委員会

(9・7 小会議室)

7月、8月のアラスカ売り上げと貸室利用状況について事務局が報告した。

出席 渡辺委員長、高橋、畑野、広江、柏木、佐藤、阿部、塚田の各委員。

第305回会報委員会

(9・9 小会議室)

8月号、9月号について意見交換した後、10月号の編集について協議した。

出席 住田委員長、近藤、菅谷、羽原、枇杷田、堀、八木の各委員。

第385回会員資格委員会

(9・14 小会議室)

自民党総裁候補討論会メモ(9・19)
▼時間 15:05~16:45 ▼第1部(49分) 各候補が有権者に一番訴えたいことを主張(持ち時間3分)の後、候補同士の討論。各候補が持ち時間10分でテーマを設定し、相手候補を指名(複数可)して論争。各候補のしめくくりの発言(各2分)
▼第2部(51分) 会場の出席者から寄せられた質問を参考に企画委員会の代表が質問し、争点や問題を明確にして第1部の議論を深めた▼総

10月1日付の会員入退会を審議し、理事会に答申した。

出席 朝倉委員長、布施、松田、坂本、齋藤、川嶋の各委員。

第390回企画委員会

(9・29 大会議室)

司会担当の委員が行事を報告した後、今後のゲスト候補などについて協議し、新しく「日米中関係」の研究会をスタートさせることにした。YouTubeにクラブ会員の動画を配信するチャンネルを持つことを決定した。

出席 船橋委員長、宮田(謙)、倉重、坂東、橋本、脇、原田、玉利、宮田(一)、高畑、菅沼、田崎、井田、広瀬、園田、泉の各委員。

合同会…川戸恵子、第1部司会…影山日出夫、第2部の代表質問者…宮田謙一、倉重篤郎、原田亮介の各委員▼ベン取材171人。スチル9社。ENG3社。参加総数は213人▼放送はNHKが総合テレビと衛星第1で第1部のみ生中継(ラジオも同様)。視聴率は関東3.8%、関西1.9%。民放はTBSが代表で取材。民放ラジオは国会放送記者会各社が取材。

情報発信

クラブ施設では会員による各種の会合が行われています。企業や大使館などの賛助会員も記者発表の場としてクラブを利用しています。

■民放東京支社に働く女性の集い

地方局の東京支社で働く女性が年に1回、勉強、交流の場として開催している。今年は、自分が裁判員に選ばれたら、をテーマに、北神英典弁護士の講演とパネルディスカッションを行った。(9.5大会議室)

■上西朗夫さんの卒業を祝う会

毎日新聞の政治部長、常務取締役、下野新聞社長などを務めた上西さんが下野新聞社会長を退いたのを機に、関係者が慰労会を開いた。福田康夫元首相、加藤紘一元自民党幹事長も出席した。(9.8 10Fホール)

■セミナー「世界に広がる通訳の仕事」

NPO法人通訳技能向上センター (CAIS <http://www.cais.or.jp/>) が、通訳者を目指す人々を対象にセミナーを開催した。ジャーナリストのサム・ジェームソンさんと小松達也CAIS理事長の対談や、通訳者によるパネルディスカッションなどが行われた (9.12 10Fホール)

■御柱祭記者発表

2010年4月1日から6月15日まで開かれる諏訪大社の御柱祭について発表が行われた。古くは桓武天皇期 (781~806) の記録があり、現在は7年に1度行われている。詳細はHP=<http://onbashira.jp/> (9.17 10Fホール)

■鳩山外交は大丈夫か

未来をひらく日本委員会 (尾畑雅美代表 <http://www.nihoniinkai.com/>) で、藤澤秀敏・NHK解説委員長が講演した。(9.17 10Fホール)

■政権交代後の日本政治の行方

日本ジャーナリスト懇話会 (竹田純会長) で、永原伸読売新聞論説委員が鳩山政権、野党自民党の行方について分析した。詳細は同会会報に掲載。(9.25 大会議室)

■静岡グランシップでオペラ「椿姫」

静岡県の複合文化施設「グランシップ」(静岡市駿河区 <http://www.granship.or.jp/>) の開館10周年記念事業として、12月にオペラ「椿姫」を上演することが発表された。田村孝子館長や主演のソプラノ歌手中丸三千繪さんらが会見した。(9.25 10Fホール)

■細川隆一郎さん お別れの会

8月25日に亡くなった政治評論家の細川隆一郎さん(毎日新聞出身) のお別れの会が行われた。鳩山首相もあいさつし、初めての出会いが父・威一郎氏をなくした直後で、以来「親父代わりに指導してくださった」と悼んだ。中曽根康弘氏、安倍晋三氏、福田康夫氏ら政治家も多く出席した。(9.28 レストラン・アラスカ)

■健康食用油「カロチーノ」記者発表

マレーシア政府承認ブランドの健康食用油「カロチーノ」の新商品「カロチーノクラシック」の発表を行った。マレーシア大使も出席し、オイルを使った料理も提供された。問い合わせはイエナ商事 (<http://www.yehna.co.jp/>) へ。(9.28 10Fホール)

■TBSとテレビ朝日がYouTubeで映像配信

TBSとテレビ朝日が、グーグルが運営する動画共有サイトYouTube (<http://www.youtube.com/>) にコンテンツを配信する「公式パートナー」となる契約を結んだことを発表した。YouTube上に自社チャンネルを持ち、ニュース映像などを配信していく。TBS NEWSi=<http://www.youtube.com/tbsnewsi> テレビ朝日ANNニュース=<http://www.youtube.com/ANNnewsCH> (9.29 10Fホール)

■放送人政治懇話会

次のようにゲストを招いた。鈴木恒夫・前文科相 (9.9)、平沢勝栄・自民党衆議院議員 (9.15)、福山哲郎・外務副大臣 (9.30)。

新しいOB会員



たかはら ひろし
▼高原 浩

1969年日本経済新聞入社。電波本部企画委員、QUICKアメリカ社長、日経映像取締役衛星放送本部長、BSジャパン常勤監査役など。

心身ともにまだまだ現役のつもりです。初心に戻って激動の時代をウオッチしていきたいと思えます。よろしくお願ひいたします。



ふかがわ まこと
▼深川 誠

1956年日本経済新聞入社。政治部長、テレビ東京報道局長、同副社長、テレビ大阪代表取締役社長、同取締役会長などを経て03年から同顧問

このクラブが帝国ホテルにあったときからだから、もう長い歳月が流れている。折しも政権交代。時代の節目を改めて眺め直してみたい。

クラブ会見動画 YouTubeで見られます

前号で「試験的に開始」とお知らせしたクラブ会見の動画配信を本格的にスタートすることになりました(第390回企画委員会決定 9.29)。

YouTubeに「日本記者クラブ」の専用チャンネルができます。官庁や都道府県、政党、大学など公共性の高い機関がコンテンツ・パートナーとしてYouTubeにチャンネルを持ち始めています。「日本記者クラブ」も同じように動画を配信するチャンネルを開設します。YouTubeを運営するグーグルとの間で準備作業を進めており、この会報がお手元に届くころには開局しているはずです。クラブのホームページからアクセスできます。

ゲストに配信の了解を得たものが原則ですが、出席できなかった会見の確認に活用してください。特に地方紙・地方局の皆さん、持ち場を離れられない一線記者の皆さんには大いに利用していただければと思います。

これまでも注目会見や資料価値の高い研究会は全文を「会見速記録」としてまとめクラブのホームページに掲載してきましたが、テープ起こしから編集まで手間も時間もかかり、スピードに欠けるのが難点でした。動画配信は会見当日中、遅くとも翌日にはアクセスできる予定です。

会見内容を公開することで、会員以外一般の人がクラブの活動を直接、知ることが出来ます。クラブが広く社会の公益に資する組織であることにもつながります。もちろん、外国からもアクセスできますので、内外要人のクラブでの発言が世界に伝わり、日本記者クラブのニュース発信機能の強化にもつながります。そのためYouTubeのさまざまな機能を生かす工夫も検討します。

ぜひ活用していただき、ご意見がありましたらお寄せください。

ホールご案内

会員社のホールで開催されるコンサートなどの情報をご紹介します。

●日経ホール

♪12 / 8 (火) ロシア国立モスクワ・アカデミー合唱団 ファンタスティック・コンサート
～ロシア伝統の歌とオペラ名曲集～
かつて日本にロシアブームを巻き起こした重鎮、アレクサンドル・スベシニコフによって設立された合唱団の精鋭によるハーモニー。(4,500円)
問い合わせ：03-5281-8074
<http://www.nikkei-hall.com/>

●サントリーホール

♪11 / 23 (月・祝) オルガンレクチャーコンサート シリーズ2009アンナ・マクダレーナが愛した夫-J.S.バッハ
バッハの妻からみた夫の人間像を、バッハのオルガン作品と共に紐解くコンサート。(3,000円)
チケットセンター：03-3584-9999

●王子ホール

♪11 / 25 (水)
ウェルナー・ヒンク&遠山慶子
モーツァルト・ヴァイオリン・ソナタ全曲演奏会
2008年までウィーン・フィルのコンサートマスターを務めたウェルナー・ヒンクと、日本人演奏家のパイオニアとして国際的に活躍している遠山慶子の息のあった共演。(6,500円)
問い合わせ：03-3567-9990

バー、レストラン、宴会

予約電話 和食3503-2723 洋食3503-2766



国産牛のしゃぶしゃぶ 11月13日まで

国産牛のロースを使ったしゃぶしゃぶを期間限定で提供します。お一人3,150円です。辛口で口当たりのよい宇都宮の地酒「四季桜」とともにお楽しみください。(板長 渡邊実)



伊勢海老のトリュフ・ソース

10月30日まで伊勢海老のコースをご用意します。蒸し焼きの伊勢海老を香り豊かなトリュフ・ソースでお楽しみください。ランチタイムにも召し上がっていただけます。

MENU キノコとベーコンのキッシュ、伊勢海老、葡萄のゼリー、パン、コーヒー 2,980円
(シェフ 黒須修一)

クラブの電話 ダイヤルイン

和食レストラン (9階)	会員事務
3 5 0 3 - 2 7 2 3	3 5 0 3 - 2 7 2 5
洋食レストラン (10階)	経 理
3 5 0 3 - 2 7 6 6	3 5 0 3 - 2 7 2 8
貸室予約、宴会打ち合わせ	クラブ行事への申し込み
3 5 0 3 - 2 7 2 4	3 5 0 3 - 2 7 2 2
受 付	会見申し込みアドレス
3 5 0 3 - 2 7 2 1	kaiken@jnpc.or.jp

会報委員会

委員長=住田良能
委員=小西美和子 近藤憲明 菅谷 齊 富田 恵
羽原清雅 枇杷田裕 堀 徹男 村澤繁夫
八木浩幸
連絡=長谷川和子 本庄五月
(電話 03-3503-2752 FAX 03-3503-7271)

●11月4日に創立40周年記念パーティー

1969年11月1日にクラブが設立されてから40年が経ちます。40周年を記念して下記のようにパーティーを開催します。会員のみなさんのほか、政界・財界をはじめ、最近クラブゲストとしてお迎えした方々もお招きする予定です。参加費は無料です。
日時：11月4日(水) 17:30~19:30
場所：10階ホール、アラスカ

記念出版「とっておきの話(6)」

創立40周年記念出版の「とっておきの話(6)」を11月初旬、全会員にお届けします。創立15周年から5年ごとに刊行しているもので、この5年間にクラブ会報に連載した「書いた話 書かなかった話」(51編)と「新春随想」(5編)を再録したものです。記念パーティーにお招きしたゲストにお持ちいただくほか、全国の都道府県立図書館にも寄贈する予定です。

法人賛助会員としてテプスターが入会

東京電力グループに属し、東電はじめ電力各社の火力発電所に燃料油などを供給している株式会社テプスターが法人賛助会員として10月から入会しました。登録会員は下記のおふたりです。

西廣 泰輝 代表取締役社長
天沼周次郎 取締役社長室長

<訃報>

鈴木襄会員(個人D・読売新聞OB、81歳)が9月23日肺がんのため、高橋久雄会員(個人D・中日新聞OB、85歳)が同日肺炎のため死去されました。謹んでお悔やみ申しあげます。

<会員現況> 法人会員 140社 基本会員 774人
個人会員 1,535人 法人・個人賛助会員 70社 177人
特別賛助会員 80人 名誉・功労会員 9人

計 210社 2,575人

HP <http://www.jnpc.or.jp/>

資料室 「会見速記録」：9月の新規掲載

●自民党総裁候補討論会 (9.19) ●石原信雄元内閣官房副長官「政権交代をどうみるか」(9.4) ●松本正生埼玉大学教授「世論調査へのエール」(9.3) ●田中秀征福山大学客員教授「鳩山政権、成功のカギは?」-細川・非自民連立政権の教訓-(9.2) ●中田宏横浜市長「参院選での新党も視野に」(8.4) ●辻井いつ子さん 著者と語る「今日の風、なに色? / のぶカンタービレ!」(8.3) ●孫崎亨 元イラン大使「アメリカはなぜアフガニスタンで成功しないのか」(7.15) ●萩原雅之ネットレイティングス(株)エグゼクティブフェロー「世論調査にハイブリッド方法を」(7.10) ●作家・水村美苗さん 著者と語る「日本語が亡びるとき」(2.6)

今後の行事予定 (10/6現在)

10.19 (月) 13:00~14:30 (10階ホール)
著者と語る 『デモクラシー以後』『帝国以後』
エマニュエル・トッド人類学者
15:30~17:00 (10階ホール)
研究会「日米中」① ケント・カルダー ジョ
ンズ・ホプキンス大学教授

行事案内専用電話 03-3503-3764

日時の変更なども含め、最新のクラブ行事をテープでお知らせしています。

写真回廊

撮影

栗橋

隆悦

(くりはし・たかよし
産経新聞写真報道局)



神奈川県葉山町 9・14

船遊び

船遊びを終えた「未来の陛下」は、しっかりとした足どりだ。大切な宝物を守るかのように相手を崩すのは、おじいさまの陛下。おばあさまの美智子さまも悠仁さまの元気を頂いて、お膝の痛みも忘れたかのような立ち姿でいらっしやる。愛らしい3歳児の動きにスタッフ全員の表情も明るい。

巧みな手捌きで和船を操る陛下は一色海岸の200メートルほど沖合まで行かれ、途中、皇后さまも櫓を漕がれた。陛下が和船を漕ぐのは即位後三度目。毎回、悠仁さまをご一緒されている。9月14日のことだ。

こんな事を思い出した。昭和40年代後半から50年代にかけて皇太子御一家(当時)は浜名湖の細江町で、よく夏休みを過ごされた。滞在されたのは電鉄会社の寮と記憶している。陛下は、お小さかった浩宮、礼宮に得意の水泳をお教えになり良きお父さまぶりを発揮されていた。

その昔、筆者は水のきれいな浜名湖で和船に乗られた御一家を取材したことがある。昼は水泳や鰻の養殖場見学、そして夜は蛸狩り。細江町役場の会議室には思い出の写真が多数飾られている。悠仁さまの水泳のお手ほどきは、おじいさまである陛下に、お願いしたいものだ。(渡辺みどり)

皇后さま御歌

蛸

われら若く子らの幼く浜名湖の水辺に蛸追ひし
思ほゆ
(平成二年)